
関西ベ平連の活動と 「ハンパク（反戦のための万国博）」

山本 健治¹⁾
フリーライター

番匠 健一

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

はじめに

本稿は立命館大学国際平和ミュージアムでのミニ企画展示「ハンパク 1969—反戦のための万国博—」（会期：2019年7月17日～8月24日）に合わせて、2019年7月20日に同ミュージアムで開催されたトークイベント「ハンパクがもたらしたもの」の記録である。立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターでは、研究プロジェクト「博物館の資料研究」〈戦後社会セクション〉において2018年から関西を中心とした戦後の反戦平和運動の研究をすすめるため、「反戦のための万国博（ハンパク）」²⁾に焦点を当て資料調査、聞き取りを継続的に行ってきた。本企画はその中間発表として開催されたものであった。高度経済成長の到達点としての1970年大阪万博に日本社会の関心が集まるなかで、前年1969年8月に大阪城公園を会場として同時代の反戦文化を結集した「反戦のための万国博（ハンパク）」が開催された。山本健治氏は、関西ベ平連の活動から「ハンパク」事務局の中心メンバーとして企画に関わった一人である。山本氏のトークの背後では、倉田光一氏撮影のハンパク会場の写真のスライドショーも同時に行われ、写真やピラなどの当時の記録と記憶について参加者と対話が行われた。

ハンパク(反戦のための万国博)と四つの問題系

○山本 こんにちは。

我々がやったことが、こんなふうには歴史になるとは全く思ってもおりませんでした。私自身はいろいろな運動についての年表をつくったり、論評を書いたりする仕事をいくつもやっているんですが、自分がやったことについては、全く記録も何もっていない。今日、展示されているものについても、そういうものがあつたなというぐらいの記憶で、全ては他の人がみんな残しておいてくれたものです。展示にいろいろな写真が出てきますが、この中にも私たちやハンパク事務局長木村満彦が出ているものは一枚もありません。縁の下の力持ちでしたので、全く表に出ない、これはこれで一つの記録として理解していただいたら結構かと思います。

我々がハンパクというものをどういう形で始めるようになったかというのは、今日、配られている資料以外に、「70年万博（大阪・千里丘陵）とベトナム戦争、ハンパク」という、私がメモ書き程度につくった資料を中心にしてお話をさせていただきたいと思います。

ハンパクを考えるときに、大きく4つの問題が柱としてありました。

1つ目は、申し上げるまでもなく、千里丘陵で1970年に大阪万博が開かれることに対して、我々は何か物を言おうと考えたことです。

2つ目はもちろん、その万博に対して物を言う

きに、どういうスタンスから我々は物を言うのかという点です。その当時、我々関西ベ平連が中心的に活動しておりましたベトナム戦争を止めさせる闘い、また反安保、日本がアメリカに協力をして、まさに共犯者と言っていいことをやっていたことに対して、我々がはっきり物を言っていこうということです。

3つ目は、この万博が「人類の進歩と調和」というテーマを掲げていた。技術に対する単純な肯定、そして現実存在しているさまざまな問題、公害や環境破壊や薬害、あるいは日本の社会が抱えているさまざまな問題について触れようとしない。経済成長や技術の進歩は「すばらしい」「結構なものだ」ということに対して、そんなばかなことがあるか。日本の中にはこれだけたくさん問題があるではないか。我々だけではできないから、全国の問題の先頭に立って闘っている人たち、あるいは現実に苦しんでいる人たちに出てきて発言してもらおうと考えました。

4つ目は、ハンパクの会場についてです。大阪府下に大きな空き地がないかいろいろ探しました。そのとき大阪城の東側には、旧日本陸軍の造兵廠（大阪砲兵工廠）という、兵器をつくっていた広大な工場跡地がありました。私は1943年の生まれで、この大阪城のすぐ南側の玉造にあります府立清水谷高校に通っていたわけですが、毎朝通学時に大阪造兵廠の空襲でねじ曲げられた鉄骨や残骸を見ながら登校していたわけです。これこそが大阪が空襲を受けた、大阪が戦争にかかわったまさに生き証人だと。ちょうど70年万博の準備が始まった頃から、これを撤去する動きが出てきました。それに対する反対運動もあったわけですが、全部なくして更地にしてしまった。今、大阪ビジネスパークになっています。ここに大きな空き地がある。これを何とかして借りて、かつての戦争の問題や、今直面しているベトナム戦争や、日本が抱えているさまざまな問題について物を言う、我々なりの万博をやるのではないかということから、「反戦万博（ハンパク）」を考え出したんです。

立命館大学での学生運動と京都ベ平連

それを語るに当たって、私がどういう経緯でベトナム反戦運動にかかわったかお話をしたいと思います。アメリカがベトナムに本格的に爆撃を始めた頃、立命館大学の法学部の学生でした。政治学ゼミにいて、指導教授である清水慶三先生が、トンキン湾事件やドンホイ爆撃が起きたときに、ゼミの学生に対して、君らはアメリカのベトナムに対する爆撃について、どう考えるかと質問を投げかけられました。ほぼ全員が、これはアメリカの暴挙であるという点では、一致したわけです。しかし、こんなことがいつまでも続かないだろうと。いずれ国際的な世論の中で、手を引いていこうという意見がかなり多くありました。それに対して清水慶三先生が、君らはアメリカに対して甘過ぎる。アメリカは、このベトナムで負けてしまうと、東南アジアでアメリカの政治的影響力がなくなりドミノ現象が起きる。だから、彼らはとことんやってくるだろうと言われました。

事実、その後の経過は、特に南ベトナムを中心に、民族皆殺し（ジェノサイド）のようなことになっていった。私は当時、立命館の学友会の委員長をしておりまして、みんなと一緒に河原町でデモをしたり、円山公園で京大や同志社の連中と京都府学連の集会をしたりしていました。

他方で、アメリカの北爆や虐殺に対して、作家の小田実さんを初めとする市民、作家、学者、芸術家、さまざまな人たちがベトナム戦争に反対する運動を起こしていこうということで、「ベ平連」が活動を始めていました。最初は「ベトナムに平和を！市民文化団体連合」という名前でしたが、その後「ベトナムに平和を！市民連合」となり活動が始まったのが1965年4月でした。

京都でも京大の桑原武夫さんや鶴見俊輔さん、飯沼二郎さんらを担いで、当時の京大人文学研究所におられた飛鳥井雅道³⁾さんや中岡哲郎⁴⁾さんたちが中心になり、京都ベ平連を発足させようと運動が盛り上がってきました。飛鳥井さんや中岡さんから、「山本君、学生をベ平連の集会に来てくれるよ

うに手伝ってくれないか」と誘われ、立命館大学の中でも宣伝をしました。同志社大学の入り口にあります寧静館の大教室で集会をやり、そこで京都ベ平連が発足をして活動が始まっていきました。

私は1966年3月に立命館大学を卒業しまして、大阪の読売広告社、後には村田製作所で働くことになったわけですが、卒業してベトナム反戦に対して何もしていないわけにいかない、自分なりに運動を考えていこうということで、大阪でも活動をするようになりました。

大阪万博へと向かう流れ

ちょうどこの頃、政府や大阪府・市、財界なんか、70年万博を盛り上げようといろいろやっていました。1964年に東京オリンピックが開催され、大阪でも何かしなければいけないと、1965年2月に大阪府や日本政府がパリにある国際万博協会に参加して、1970年の万博開催となったわけです。今回の2025年の大阪万博についても、東京でオリンピックをやったんだから、大阪でもやろうというような、ばかばかしい発想が今も残っています。

万博が具体的に動いていく中で、我々が一番危機に感じましたのは、当時、ベ平連にさまざまな活動で参加していた作家、デザイナー、画家やイラストレーター、そういう人たちが万博に吸いとられていくんですね。万博協会がさまざまな事前イベントをやり、あるいはいろんな仕事を発注していきます。ベ平連の「殺すな」という字は岡本太郎さんが書いているわけですね。その岡本太郎が、千里万博の目玉の太陽の塔をつくるようなところへ引き連れられていくんですよ。我々はそれを見ていて、情けないなと思った。ベトナム反戦だ、反安保だと言っても、万博のような、大きな派手なものができると、ベトナム反戦も反安保も言わなくなってしまう。「人類の進歩と調和」礼賛に流されていってしまう。

SF作家の小松左京⁵⁾さんもそうでした。最初のころはベ平連にも賛意を表して、協力してくれてい

たんですが、バラ色の未来へ引っ張られていきました。ベ平連は、「来る者は拒まず、去る者は追わず」が原則でしたから、別に文句も言わずにどうぞという感じだったわけですが、何も有名な作家やイラストレーターが行くだけではない。多くの人々が魂をそっちにとられていってしまうと危惧したのです。

それに対して、日本の中にはこんなに深刻な問題がある。ベトナム反戦をやはり語らなければならない。そして、ベトナムを他人事として考えるのではなく、大阪にはベトナム戦争に協力している企業がいくつもあるではないか。

ベトナム反戦運動と大阪

2019年6月28、29日に大阪で開催されたG20サミットに、トランプがあのだでかい飛行機エアフォースワンでやってきました。なぜ、伊丹空港に来たか。大阪で開催されたからだけではなく、あそこに新明和工業⁶⁾があり、米軍の戦闘機などの修理技術を持っているからです。戦前、「紫電改」をつくった川西航空機だった。それが戦後も、アメリカ占領時代には朝鮮戦争に、そしてベトナム戦争にも協力をしているという厳然たる事実があるではないか。これを忘れてはいけないという思いが我々にはありました。

もう一つは、ベトナム戦争で一番残虐に使われた枯葉剤でした。ジャングルにゲリラがいる、それを焼き尽くし殺し尽くすということで、アメリカは枯葉剤を含めた焼夷弾、ナパーム弾を全土にまきました。とりわけ中部から南部にかけて焼け野原にしました。その原材料は、日本油脂という尼崎の神崎川のところにある工場⁷⁾でつくっていたんです。こうしたことについて、黙っているのかということで、我々は伊丹空港にも、新明和工業にも抗議に行ったり、あるいは日本油脂に対しても抗議に行きました。工場門前に行くと、化合労連日本油脂労働組合の幹部が出てきて、「山本君、あんまりごちゃごちゃ言わんといてくれ」みたいなことを言うんです。一体何なんだという腹立たしい思いが我々にはありました。

労働運動に対する不信感もありましたけれども、いずれにせよ、大阪はベトナム戦争と無縁ではないんだ。実際に加担しているではないか。このことを抜きにして大阪を語ることはできない。我々の運動というのは、具体的な問題を抱えて活動していかなければならないんだと考えたわけです。

大阪では、ベ平連のような運動以前に、若い労働者や社会党の青年部・社青同の人たちが中心になって、さまざまな活動をやる大阪行動委員会というのがありました。我々は大阪行動委員会という名前だと、地域的にも限定されるし、労働組合が中心になっているという感じもあるので、労働組合に関りのない人でも参加できる、もっと広い形での運動を考えようということから、関西ベ平連を発足させました。ちょうど私が卒業して、大阪読売広告に勤めていて、比較的自由にいろんなことができたので、大阪行動委員会をやってきた人たちと一緒に、さらに広げる形で活動していこうじゃないかと。当時、ベ平連が各地でできていく中で、関西では、西は姫路ベ平連から、東は伊賀上野ベ平連に至るまで、近畿圏だけでも100近いベ平連がありました。

大阪の扇町公園や難波で集まるときには、何か旗印が要る。「大阪ベ平連」と名乗ると限定されてしまうので、関西ベ平連という広い旗を掲げよう。そしたら、みんなここに集まってくるだろうと考え、活動を開始していました。連合体のようだけれど組織ではない。その都度連合体で、それぞれのベ平連はいつもはそれぞれの場所で行動し、何かあったら関西ベ平連の旗の下に集まるというものでした。例えば北摂ベ平連という豊中を中心にした連中は、定期的に新明和工業に毎月デモに行く。アメリカの戦闘機が伊丹空港に降りてきたといたら、抗議に行く。水陸両用のアメリカ艇が降りてきたら抗議に行くというような活動をやっていました。

そういう活動が各地でどんどん行われていく中で、それをかき消すような形で大阪万博という流れが出てくる。有名な作家やイラストレーターたちがあっちへ流れていってしまう。残ったのは、黒田征太郎⁸⁾さんぐらいというような感じがあって、非常に腹立たしいものがあつたんですね。我々としては、

何とかして流れをこちらに引きもどさないといけない。巷では、三波春夫が歌う「こんにちは、こんにちは……」(世界の国からこんにちは)が、商店街に行ったら流れてくる。盆踊りだというと、みんながうれしそうに踊りまくっている姿を見て、一体何なんだ、という思いがありました。我々は非常に腹立たしく思いながら、とにかく具体的にさまざまな活動をしていく必要があるということで、僕も木村満彦⁹⁾も、あるいはここに来ている当時の仲間も、とにかく仕事が終わったら、夕方5時から12時まで、とにかくピラをまきに行ったり、梅田地下街でベトナム戦争について語りましょう、反安保について語りましょうというゼッケンをぶらさげて、ピラをまきながら集会をする。夜遅くなってくると酔っぱらいが通ってきますから、「おまえら、あほか」みたいなことを言う。それに対して、「そんなことあるかい」と言って、ちゃんと議論をする。そしたらおもしろいもので、論争に負けると、「しゃあない、おまえに1万円やる」とか、「千円やる」とかと言って、たくさん活動カンパが集まるということがありました。

関西ベ平連と梅田・天王寺のフォーク集会

フォーク集会で言うと、東京の新宿西口広場が有名ですが、実はそれより1、2年前から関西ベ平連が中心になって、梅田地下街で毎週末フォーク集会をやっていたんです。最初は我々素人がジョン・バエズの『We Shall Overcome』など反戦フォークを歌っていたのですが、そのうち中川五郎¹⁰⁾さんが『受験生ブルース』『主婦のブルース』とかを歌ったり、後には高石友也¹¹⁾さんや岡林信康さんが歌うようになったんです。毎週末、梅田地下街で活動していたんです。本当にすごいもので、梅田地下街のちょうど阪神百貨店の前から曾根崎警察署の地下の入り口に至るまで、もう座る余地がないほどみんなが座り込んで、ただし通行できるスペースだけは、この間の香港みたいにずっとあけて、一切警察が介入できないよう集会をやっていたんです。

東京の新宿西口では逮捕者がありましたが、梅田地下街での集会、フォーク集会ではただの一人も逮捕者はありませんでした。それはみんなが座り込んで警察が入り込めないようにしてくれたからです。警察が来ると「何を言っているんだと、ずっと通れるじゃないか、何も通行の邪魔をしてない」ということで、みんなが「帰れ、帰れ」というシュプレヒコールで押し返してしまっただけです。たまたま通りかかった俳優の田中邦衛さんも一緒になって言ってくれたこともあります。もちろん、地上に上がりましたら、大阪駅広告塔の前では捕まりましたけれども、地下街では一切捕まらないような、そういう活動を続けたわけですね。

それで、万博の流れがどんどんどんどん強まって行って、さっきも申しましたように、さまざまな宣伝がマスメディアで行われて、雰囲気がつくられていきました。そんななかで、我々は万博について具体的に何か物を言わないといけないんじゃないかという話が出てきて、南大阪ベ平連の連中が、「万博反対・反戦万博」というのをやろうじゃないかと言いつつ出た。もちろん、我々も賛成ということになって、会議を重ねるなかで、小田実さんが「ヤマケン、万博に反対とかいう言い方、反対、反対というのは、もうやめておこうや」、「反対はええけど、われわれでもう一つの『バンパク』の旗を立てる、もう一つの『バンパク』をやるんだ」と言った。「小さくてもええから、もう一つの『バンパク』をやるという発想で対抗していこうや。そやから『ハンパク』にしようや」と、みんなに呼びかけ、そうしようということになったんです。しかし我々だけでは、当然「ハンパク」はできません。各地のベ平連はもとより、水俣から、三里塚から、阿賀野川から、あるいは「らいの家」¹²⁾や東京の江戸川区で夜間中学校をやってきた高野雅夫さん¹³⁾など、みんながそれぞれの問題を持ち込んできてくれて、みんなで盛り上がったというのが実際です。



写真1 なんたいべ（南大阪ベ平連）のパネル
（撮影 倉田光一）



写真2 「らいの家」内部でハガキを見る参加者
（撮影 倉田光一）

ハンパク会場としての大阪砲兵工廠跡地

問題は開催場所をどこにするかということいろいろ考えました。国・大阪府・大阪市は万博を前に戦争の跡形をすべて消してしまおうと、大阪造兵廠跡地から残骸を一切取り除き、更地に始めていました。何年前かに亡くなられた関西大学教授の小山仁示¹⁴⁾さんらが中心になって大阪造兵廠跡を残すべきだ、大阪が商工業都市ではなくて軍事都市であったことを全て抹消してビジネスパークにしようということは、戦争責任、加担責任を曖昧にするどころか、全てを消し去ろうというものだと反対運動をされていました。何としても一部でもいいから残させようということでしたが、残念ながら潰されてしまい、今の「ピースおおさか」になっただけです。大阪城の一角にはかつて第4師団司令部、「またも負けたか八連隊（歩兵第八連隊）」の連隊本部があり、その東側の大阪造兵廠は戦争の象徴なんだとい

うことから、ここで「ハンパク」をしようと考えました。我々だけだったら、なかなか貸してもらうことはできなかったのですが、ベトナム反戦・反安保、反戦・平和をともに行動してきた大阪市職労やら大阪府職労など労働組合の幹部たちが「ハンパク」の趣旨に賛同して協力してくれました。彼らがいろいろ手を尽くしてくれて、借りることができるようになり、閉会后のごみ処理とか後始末についてもスムーズにできるようになりました。

その点では、大阪行動委員会の段階で、労働組合の活動をしている若い人たちと一緒に手を組んでやっていったことが、ベ平連活動の中でも生かされました。後に若い労働者たちは、反戦青年委員会を名乗っていきます。我々市民はベ平連ということで、大阪で若者が集まる時には、反戦青年委員会と関西ベ平連が共催で御堂筋デモや集会をするという形になったわけですね。

もう一つ、この場所に強くこだわりましたのは、小田実さんです。開高健さんも『日本三文オペラ』のなかで、あの残骸のところでの人間模様をつづっています。小田実さんは大阪の寺田町あたりで生まれ育って、東大に行くわけですが、「ヤマケン、第二次世界大戦の最後の空襲は大阪やで。大阪を忘れたらあかんで」と、いつも言うていました¹⁵⁾。8月14日の正午ごろに、森ノ宮から京橋にかけてB-29が150機、大阪を襲っているんですね¹⁶⁾。天皇の玉音放送の1日前、まさに最後っ屁の爆撃を大阪の京橋にしているんです。現在、京橋の一番南側に行くと慰霊碑があります¹⁷⁾。犠牲者はわかっているだけで300人ぐらい。しかし当時生き残っていた人たちの証言では、おおよそ2,000人ぐらいその空襲で亡くなったようです。この場所は、そういう意味でハンパクをやるにふさわしい場所ではないかと小田実も考えていたと理解していただいたらいいかと思います。

この展示の写真に、関西工機という工場が映っているのがありますが、あそこには昔の砲兵工廠の残骸の鉄を切って、くず鉄にする工場です。裁断して、くず鉄にしていた工場が最後まで残っていたんです。その横でハンパクは開催されたのです。



写真3 ハンパク会場。右奥に関西富士鋼機、左奥に大阪城、そして中央には京都ベ平連の反戦祇園祭の鉢、右にはホットドック屋の看板がある（撮影 倉田光一）

大阪空襲の記憶と戦争の傷跡

私は1943年12月に大阪の守口で生まれています。大阪大空襲が合計8回にわたって行われていて、最後の第8波が1945年8月14日正午ごろで、大阪造兵廠と京橋駅がやられたんです。私はまったく空襲の記憶がないんですが、隣のおばちゃんは「健ちゃん、あんたが今生きているのは、守口が空襲されたとき（1945年6月15日）に、あの火の粉の中を私が背中に背負って逃げてあげたからやで」といつも言うていました。私には、大阪大空襲の直接の記憶はないけれども、子どもの頃の日常会話に出てくる話題だったんですね。それが万博となると、あつという間にその残骸や記憶を全部消してしまう。そんなことが許されてたまるかという思いがあったことは事実なんです。

小学校の頃の記憶で言いますと、クラスのある同級生は顔と右腕にケロイドがありました。それは大阪大空襲のときのやけどだったんです。彼は5年生か6年生になる前に、ほかの病気もあったんですが、亡くなってしまった記憶が残っています。

1950年、朝鮮戦争の年に小学校へ入学しました。ちょうど三洋電機の本社だったところに今は守口市役所がありますが、小学校はその横でした。少し前に廃校になってしまいましたが、その裏側のところに同級生がいて、彼のところにある朝、学校に誘いに行くと、MP、占領軍のジープがとまっていた。その同級生の親父を連れて行こうとしていた。そ

これはレッドページだったんですね。朝鮮戦争に反対する共産党員とか反戦の教員を逮捕していく一連の動きだったんですね。我々子供が、「行ったらあかん、連れて行ったらあかん」みたいなことを言うけれども、子供の前では「わかった、わかった」みたいな顔をして、学校から帰ってきたら連れて行かれていた。そういう現実が我々の脳裏に残っているんです。朝鮮戦争が始まるや、小学校が国道1号線に面していたから、西へ西へと、毎日、戦車や軍用トラックが走っていく、そういう情景があったわけです。敗戦から5年、そういう状態でした。

僕らの世代の記憶には戦争の傷跡があり、戦争は終わってない、現実が続いている。沖縄なんかは戦略爆撃機が30機も50機もベトナムに飛んでいった。大阪でも朝鮮戦争のときには、そうだったわけです。忘れることはできない、非常に大きな、重い記憶として残っていました。だから反戦というもの、大阪が戦争で大変な空襲を受けたことについて忘れてしまうことはできない。

小学校と中学校の同級生には、子供のときから満足に飯が食えないのもいました。小学校や中学校時代ずっと見ている、市場のごみ箱をあさって飯を食う毎日を送っている同級生もいました。その中で、後に関西大学の教授になる鈴木祥蔵¹⁸⁾さんら学校の先生が、戦争で大変な目に遭った人たち、あるいは在日朝鮮人、被差別部落、そういう子供たちに何とかまっとうな教育を受けさせなければならないという活動をしておられました。その中に入っていた1人が担任の教師で、とにかくいろいろ生徒の面倒を見ていました。私の家は貧乏でしたが、両親がおりましたおかげで飯を食わせてもらって、大学も出て、こういうことをしゃべれる人間になっているわけですが、我々の世代にとって、戦争というのは無視することができないんですね。だから70年万博についても、大阪の残骸と同時に我々自身が歩んできた大阪の戦争の歴史、そして今、ベトナムの人々が我々と同じように空襲を受け、とんでもない事態に陥っていることに対して黙っているわけにはいかない。そういう意味で、ベ平連の活動をやっているという精神的な原動力は、今日ここに集まった一

緒にやった仲間が共有していた、僕らの世代の気持ちでもありましたね。それが根底にあって、このハンパクというのができたんだなと思っています。

問題の広がり：公害、学校教育、肉体表現

ハンパクで反戦以外にもいろんな分野の展示物を出そうというふうになったのは、千里万博のテーマ「人類の進歩と調和」では技術は素晴らしいと言うけれども、ほんとうにそうか考えてみようという問題提起をしたかったのです。1960年代半ばから既に、光化学スモッグとか大気汚染、海・川・水の汚染、土壌の汚染、薬害が日本各地で明らかになっていました。例えば神崎川は今みたいな水の色ではなくて、それこそペンキを流したような色でしたし、すごい油でぎらぎらしていました。私は、大阪の守口から京阪電車に乗って学校に行くのですが、大阪には黒い雲が覆っているんです。ばい煙の黒煙こそが大阪繁栄の象徴だといわれていましたが、西淀川の大気汚染と健康被害は良く知られていたとおりで、公害は現実の問題としてあったわけです。万博では、そういうことを取り上げようとしません。そんなばかなことがあるかということで、我々自身が知識だけで知っているものではなくて、現実に健康被害が生じて大変な状態に置かれている人たちが出てきて、話してくれるとものすごく大きな説得力があります。ハンパクがさまざまな問題についてみんなにアピールする場になれば、我々は一つの役割を果たすことができるのではないかと思ったんです。

実際に、全国各地からハンパクに参加してくれて、数は何団体か全く覚えていないんですが、数え切れないぐらいの人たちが来てくれました。当時、学園闘争があって、日大全共闘や東大全共闘を初め、各地でいろんな活動がありました。高校でも全共闘ができて、校則に反対するとか、受験競争とはそもそも何なんだとか、あるいは大学のマスプロ教育はおかしいではないか、そういう問題提起がありました。彼らも参加してくるという形になって、ハンパクの参加者がどんどん広がっていった。そして、問題提

起する分野がどんどん広がっていったというのが実態でした。事務局をやっている我々は、とにかく毎日参加者やグループがどんどんどんどん増えていくのに追われていたというのが正直なところでした。みんなはそれぞれ真剣に問題提起してくれているから、非常におもしろい場になったのではないかと思います。

展示の写真の中で男たち数人がパンツ一枚で「わいせつ」に関してものを言っているのがあります。あの当時、今も日本の映画では陰毛や性器が出てくるとわいせつということで発禁処分を受けてしまう遅れた国ですが、あの当時、武智鉄二だったか、何かの映画で陰毛が見えたから上映禁止、わいせつ罪で起訴されるようなことがありました¹⁹⁾。そもそも言論の自由だ表現の自由だと言いながら、自由を奪っているのではないかということから、問題提起しようというグループが下着一つでパフォーマンスしていた写真です²⁰⁾。日本に表現の自由はあるのかという問題提起だったんです。

このグループは当初は素裸でやりたいと言っていました。しかし、我々事務局はパンツをはいてくれと言いました。その理由は、ハンパクにはもう一つ非常に大きな問題がありまして、それを何としてもやりとげたかったからです。

ファントムの残骸から想起されるもの

1968年6月に九州大学に米軍の戦闘機ファントムが墜落して、大変な火事になりました²¹⁾。その戦闘機を九州大学の学生たちが、これは絶対返さない。日本の安保問題、日米軍事同盟の危険性を象徴するものだということで、自分たちで管理していました。もちろん米軍も日本の官憲も何とかしてこれを取り返そうとしたんですが、彼らは守り続けた。これこそが日本がアメリカに従属する形でベトナム戦争に協力させられ、さらにその被害を受けている最大の生き証人、これを何としてもハンパクで展示したいと考えたのです。

展示するのはいいんだけど、会場の外側には



写真4 万博破壊共闘派のパフォーマンス(撮影 倉田光一)

大阪府警が待機しており、公安警察やアメリカのCIAがさまざまな形でスパイを会場の中に入れておりましたので、何かトラブルがあったり、違法行為があれば、それを口実にすぐさま機動隊が入ってきて戦闘機の残骸を持って帰ってしまう可能性がある。だから、悪いけれど絶対ちんちん見せたらあかんで、警察が入ってくる口実はつくってくれるな、これだけは守ってくれ、君らが表現の自由について主張するのは構わないけれども、この戦闘機だけは絶対に我々としては守りたいから協力してくれと説得しました。

墜落した戦闘機の話にもどりますが、いつここに入ってくるかわからない、いつ出て行くかわからない、全部誰にもわからないようにしよう。もちろん事務局の我々も知らん顔をしていよう。しかし、日本の官憲、自衛隊、アメリカ軍、アメリカCIAに、絶対この戦闘機をとられずに展示し、そして誰もわからないうちにこっそり持って帰る、それを絶対やりとげる。もちろん、九州大学の学生からは、絶対にそうしてくれるんだなと念を押され、いや、もちろん総力を挙げてやりますと約束し、彼らも納得してくれて展示させてもらいました。もちろん九大の学生も彼らなりの防衛隊みたいなものをつくりながらやってくれて、無事に返すことができたという意味で、非常にすごいことができたと思っています。皆さん、やはり実際に墜落した戦闘機をだれも見ることがないと思うんですよ。アメリカの戦闘機はこんなものなんだ。それが墜落して、こんなことになるんだ。それを想像してほしい。この残骸から、ぜ

ひ戦争の実際を考えてもほしい。このファントムの残骸はハンパク展示の目玉商品であったわけですが、みんなに強烈なインパクトを与えたと思います。

後に、私が関西テレビの番組に出演したとき、司会をされていた落語家の桂南光さんが「ヤマケンさん、ハンパクやってはったんやろ。僕、あそこへ高校生の時、行きましたで」と話してくれました。漫才の西川きよしさん、横山やすしさんも、まだ駆け出しのころでしたが、ハンパクを見に来ていました。新聞社やテレビ局の取材はいろいろありましたけれども、それ以外に、意外と多くの人が見に来てくれた。そういう意味で我々は問題提起をすることができたのではないかと思います。

ハンパク後をどう生きたか：

公害・職業病と労働運動

そして、我々にとってはこのハンパクで終わりじゃない、これから先どうしていくのが問題だったんですね。ハンパクで現実の問題を知ったら、当然そのことを持ち帰って、自分たちの問題として捉え返して、活動していくことが必要なのではないかと。ベ平連の活動をそのまま続けていくことは大事だし、それでやっていってもらったらいい。しかし、ここで自分たちが課題を見つけたら、さらに次の運動につなげていってほしいという思いも持っていたわけです。

私の場合はハンパクが終わった後、村田製作所の労働組合の専従書記長になりましたもので、ベ平連運動から労働組合運動に力点を移すことになったわけですね。木村満彦ハンパク事務局長は、全電通の労働組合の書記となり、それぞれ新たな運動課題を見つけていったわけですね。

私の場合は、村田製作所の労働組合運動で一番何を考えたかということ、賃上げとか時短もさることながら、もっと大事なことは労働者の健康をむしろ労働災害・職業病でした。排水汚染、大気汚染、土壌汚染、騒音などは、工場の外に出たら公害ですが、公害が出るということは、工場内で必ずそれに関わ

る重金属中毒、有機溶剤など化学物質による中毒、騒音による難聴など職業病があります。公害問題の深刻さを知ったのだから、公害を出さずにはいけないと同時に、会社・工場の中で労働災害・職業病を生じさせないようにする取り組みをせざるおえるかと考え、取り組みました²²⁾。

私は労働組合の活動をやる中で、腎臓に石がたまりまして、ものすごく痛い目にあい、手術もしました。そのとき、腎臓から出てきた石の中に、会社の現場で使っていた原材料がどれだけ含まれているか、会社の分析室の研究員に分析を頼んだんですよ。そして、手術してくれた京都府立医大の医師に、腎臓結石の中に工場現場で使っている物質が含まれているようなことはありませんかと質問すると、「絶対そんなもの出てきません」という答えでした。私はそんなことはない、これだけ現場の中で吸っているんだから必ず含まれていると思っていました。分析結果を見ると、私が思っていたとおり、現場で使っていた物質がすべて含まれていました。微量でしたから健康被害や職業病と言うことにはなりませんでしたが、量が多ければ職業病になったのかもしれない。微量ではあっても長年蓄積されると職業病になる。そして、公害として外へ出ているんだということを身をもって知りました。ハンパクで学んだことが自分の次の労働組合活動の大きな課題につながっていったのでした。

その当時、企業内で労働災害についての労働協約を結んだのは、村田製作所が初めてじゃないかと思えます。ハンパクは開催期間が終了すると終わるけれど、ハンパクで知ったことを、この後、さらに自分たちのいろんな分野の中で活動して深めていってほしいと思っていました。あくまでハンパクは一つのステップであって、終わりではない。まさに始まりだったわけです。

万博がハンパクの六ヶ月後に始まりました。私が専従書記長として労組事務所にいたある日、ある女性労働者が「山本さん、万博に行きませんか」と誘いに来てくれました。デートに誘いに来てくれたわけですね。「そやけど、悪いけど、俺は万博に反対する運動をしたから、絶対行かない。あんたも行った

らあかん」と言いました。彼女が万博に行ったか、行かなかったか、確認しませんでした。デートに誘われることがあっても、志を持ちながらずっと活動していく、そのことが運動にとって大事なのではないかと思いました。今、大阪万博2025年と言っている中で、僕は今75歳でもうよぼよぼだから、若い人たちが、また新たなハンパクをやってくれないかなと思ひながら、今日はこういう話をさせてもらいました。(拍手)

■質疑応答

○番匠 山本さん、ありがとうございました。この会場にもハンパクに参加された方、あるいは運営にかかわっておられた方がいらっしゃいます。いろいろ対話の輪を広げていきたいと思いますが、まずは山本さんのお話に関して何かご質問、あるいは展示をごらんになった方で、こういうところをもっと聞いてみたいという方がいらっしゃいましたら、ぜひ。

○山本 それは違うでというのでも結構です。

○質問者(黒ダライ兒) 2つあります。ベ平連は日本各地にあったわけで、その中で関西ベ平連という組織だけが、なぜ大阪でこれだけ大きなことができたのかなというのがすごく疑問です。今日のお話で、やはり労働組合とのかかわりがかなり深く、それでこれだけ大きなイベントができたのではないかなと思ったのですが。

○山本 関西ベ平連の活動が成功した一番大きな理由は、関西という非常に大ざっぱな地域的な広がりを持ったものにしようと考えたことだと思います。全国のベ平連の代表になっていた小田実さんが大阪出身で、開高健や大阪にかかわる人たちが最初にベ平連運動の呼びかけ人になっていたことも、大阪の人間にとっては親しみがあつたと思うんです。

あの大阪砲兵工廠の跡地は、ベ平連の中心になった人間にとっては、頭の中に焼きついている風景なんです。大島渚がここを舞台に『太陽の墓場』という映画をつくったのも、跡地の鮮烈なイメージがあつて、戦争と大阪を切り離すことが

できない。そういう意味で、ハンパクのような広がりのある運動ができたのではないかと思います。東京のように東京大空襲があつても、もう家が立ち並んでしまっている。大阪砲兵工廠のような残骸が東京の人たちの目の前にはなかつたわけですが、大阪にはあつた。これは誰にとっても強烈なインパクトを与えていたと思うんです。そういう意味でベトナム反戦とか、戦争と平和ということに即つなげられる。そういうものがあつたからではないかなと思っています。

それと、東京ベ平連、あれは神楽坂ベ平連と呼ばれていましたが、僕らは東京ベ平連と言っていました。東京ベ平連は作家や学者など知識人が多かった。大阪は僕とか木村とか、有名人は誰もおらんかったのですよ。ただの労働者、ただの市民が集つて、ええやないか、ええやないかと、もうごちゃごちゃ言わんと、とりあえずビラまきに行こうや。梅田地下街に立とうや。それで活動したというのが一番よかつたのではないかと思います。最初にこうでなければならぬという旗印の論議をすると、もう絶対にあかん。議論より行動というスタイルで活動していたから広げられたのではないかなというのが私の実感ですね。

もう一つの労働組合とのつながりという意味では、大阪城のあそこの場所を借りることができたり、あるいは会場のメインになる巨大なテントを借りることができたりしたのも、大阪府や大阪市の労働組合青年部の連中が協力してくれたのが大きい。今、日本で一番の太陽テントという会社がありますけど、ドーム球場をつくるような、そういうテント屋さんが貸してくれたのも、協力関係を持ち得ていたからです。

○質問者 私のような世代からは、とても想像できないような大きなものなので、実感もまだ余り湧かないのですが、このハンパクで多くの人々がここに泊まり込んでいたわけですね。現在だったら、東京都下でも問題になっていますが、ごみが散乱するとか、周りの建物から苦情が入るとか、そういうようなことが起きかねないと思ひましたが、機動隊を導入する格好の目的になるじゃない

ですか。それをどのようにされていたのですか。

○山本 配布した地図を見てもらうと、大阪砲兵工廠跡地はまことに広大で、近くに民家とか何もないんですよ。ハンパク会場は大阪城公園のど真ん中ぐらいのところですから、隣近所に迷惑をかけることがまずない。大音声を立てようが聞こえないぐらいの場所であったんです。民家の近くとか、扇町公園とかでやると、必ず近隣トラブルが起きるから、そもそもこういうことはできない。

もう一つは、さっき言いました、墜落した戦闘機を持ち込んで展示させてもらったので、絶対に官憲が入ってきて取り返す口実をつくってはならないという点では、ヘルメットをかぶっている連中も、かぶっていない連中も、わいせつがどうしたすっぽんぼんで行きたいという連中も、言うことを聞いてくれました。市民ルールは絶対守ってくれ、それが守れないのなら出て行ってくれ、参加してもらわなくてもいい、そういう意味での内部規律がきちりできたというのは非常に大きいと思います。小競り合いは幾つかありましたよ。趣旨が違うじゃないとか、議論はありましたけどね。講演が中止になったとかいうことはあったけれども、それ以外で対外的なトラブルは一切なかった。

もう一つの理由は、やっぱりお金です。実際いろんな形でカンパしてくれはる人がどんどん出てきた。例えば、司馬遼太郎さんが10万円カンパしてくれはりました。私は3万円だったと記憶していたのですが、木村に聞いたら、いやあれ10万やでと訂正してくれました。ハンパク協会の代表を引き受けてくれた思想家の山田宗睦さんは、本を出すということで出版社から30万円をもらってきて寄附してくれたりとか、いろいろありました。もちろん梅田地下街のフォーク集会で100円、500円、1,000円と、たくさんお金が集まった。僕らが思っていた以上に、やはりベトナム戦争や安保条約、またさまざまな公害や環境破壊について危機感をみんな持ってはった。何かやらなあかんと思ってはって、そういう活動をやってくれるんなら、カンパしてやろうという人

がたくさんいてはったことが成功の原因だと思いますね。

○質問者 私は1952年生まれで今年67歳、ハンパクの時に高校3年生17歳だったんですが、いろんなところから情報を得て1人で行きました。さっきのファントムなんかも見て、映像としての思い出はないんですよ。この倉田さんの写真の中にも、はっきり写っている写真がない。私の記憶の中では、何か細々、ちっちゃい黒いぺらぺらの金属がぼろぼろついたような、そんな印象しかなくて、もっと大きなものを期待していたら、あっ何やというように思ったのを覚えています²³⁾。特別にベ平連にも参加しなかったんですけど、フォークソングが大好き。フォークソング絡みで興味があって、ハンパクに行きました。先ほど言われていた、梅地下のフォークゲリラは、そのころフォークゲリラと呼ばれていたんですかね。

○山本 いや、呼んでない。

○質問者 片桐ユズルさんが、神戸で神戸フォーク・スクールをやっておりまして、結構人の集まりもあっていたのですが、僕が行ったときには、やっていた連中が皆パクられて数名という寂しい状況やったんです。その流れで梅地下フォークゲリラをやって、2回ほど歌いながら歩きました。ハンパクが開催されていた1969年8月9日から中津川フォークジャンボリーの第一回があったんです。前日の8月8日にハンパク会場でフォーク in ナイトという催しがあって、夜間にコンサートをやっている中でいろいろあったみたいです。私が行ったのがその翌日で、普通にコンサートをやっていたんですね。そのコンサートに出ているシンガーとか、どこかのグループの方とか、その時のことを伺わせていただいてもよろしいですか。

○山本 我々がやっていたフォークは梅田地下街を中心にしてやる、南大阪ベ平連は天王寺の歩道橋のあるあたりで、一番最初にフォークソングを歌う形でみんなにベトナム反戦、反安保を訴える中心の活動を初めました。我々は僕も木村も歌はへたくそやし、ギターは弾かれへんかったから、とにかくゼッケンをつけて、ベトナム反戦について

語り合いましょうということをやっていました。同じ立命館で、実にギターがうまくて本当に人懐っこい奥井保という先輩がいました。彼が歌を歌っていると、あっという間に彼の周りに人が集まる状態でした。そのときに歌っていたのは、ジョン・バエズをはじめとする反戦フォークで、後の吉田拓郎とか、マイク真木の「バラが咲いた」みたいなあんなのはフォークソングではないと。僕と木村は、「ああ、インターナショナル」しかあきませんので、それでは誰も寄ってこん。南大阪ベ平連はそういうことに長けていて、梅田でやっているときに中川五郎君が来て「受験生ブルース」やら、俺のつくった歌を聞いてくれとやり出した。そのうちに高石友也さんが来て「受験生ブルース」を歌って、あるいは岡林信康さんが歌わせてくれと来て、ほな、歌うてんかというふうにして広がっていった。

梅田地下街の歌の基本は、メッセージ性があること。とりわけベトナム反戦、反安保、あるいは社会を変える、はっきり意志を持って動くということでした。歌声喫茶でも、最初の歌声喫茶はかなりメッセージ性を持っていたけど、後にはただ歌う会になってしまっている。そうじゃないと。我々はやはり反戦、反安保、沖縄奪還とか、そういうようなはっきりした当時の問題をアピールしようということをやった。それでみんなが集まって来てくれた。だから、自分の歌を発表したいという人間たちも来て、自分たちで歌う、歌詞や楽譜を配っていました。

残念ながら、我々はみんなその場限りで、その時どんな歌を歌っていたとか、一切記録はありません。はっきりしていたことはベトナム反戦、反安保、そういう軸をはっきりさせて、それだけを訴えることでした。逆にそれがはっきりしてたから、集まってもらえたというのがあると思うんですね。

○質問者（平嶋康昌）私は、ハンパクのとき福岡ベ平連のイベントの現場責任者として、あの場所に行きました。ファントムは、九大の現場を占拠している学生たちとの暗黙の協定のうちに、我々の

誰かが持ってきたものなんです。運搬可能性から見ても、全体を持ってくるのは到底だめなので、尾翼の一部のみ持ってきたんです。あれを官憲に持っていかれると、捜査の手がいろんなところに及ぶので、あれをこっちに持ってきた経緯などは現場責任者である私には一切教えないということになっていました。当時、九大で大きな新しいホールを学生が占拠しておりまして、使い放題というような状態だったので、どんどん使っていたんです。集会で後ろにファントムの大きな絵を描いたものをハンパクに持ってきて、テントの中に展示されていました。ファントムの現物はテントの前の1メートル四方ぐらいの尾翼のかけらです。暇なやつが私しかいなかったもので、その前から、阪急東通商店街の別の筋の教会のちょっと駅側ですか、ベ平連の事務所に3回ぐらいお世話になりまして、関西ベ平連の組織力はすごいもんだということはわかっていました。山田宗睦さんとか、周りの学生さんとか、あるいは青年部の労働運動の人たちとかがきっちり固めていて、福岡ベ平連では僕ら普通の学生と兵学校出身のパチプロの指導者とか、労働運動をやっていた人たちの参加は余りなかったので、そういう意味の実働部隊は本当に実力がない状態だったので、非常に感心したことがあります。

フォークソングの運動についても、関西ベ平連の南大ベ（南大阪ベ平連）の連中が、よく福岡に来たぞと遊びにきて、大阪弁でしゃべり通して帰っていくことがありました。それで我々も動員され、フォークゲリラのやり方を教えてくれて、一緒にやりました。やり方がわかったので1973～1974年ぐらいまで続きました。街頭でやっていたときは警官から追っ払われたり、逮捕されかけたりしたことがありますけれども、西鉄福岡（天神）駅の中というのは誰が管理しているのかよくわからないんですけど、そこに入ると弾圧されない。弾圧されないどころか、そこでやっていたら、あっちにあって場所があるからやれと言われて、交通公社の窓口の横で毎週やることになりました。弾圧してくれないのでやめられない



写真5 福岡ベ平連のテント内に展示された九州大学に墜落したファントムの絵（撮影 倉田光一）

ので、福岡ベ平連のフォークゲリラは細々と73～74年ぐらいまで続きました。

それからファントムの残骸の後処理を山本さんたちがきちんとしてくださりまして、無事に現場へ送り届けていただきまして、非常にありがたいと思っています。ありがとうございました。

○山本 いくらしょぼいと言われても、やっぱりあの戦闘機の残骸はすごいですよ。

○質問者（加國尚志）お話、どうもありがとうございます。立命館大学の加國という者で、この平和教育研究センターの副センター長を務めております。今回、この「ハンパク1969」という展示のために、番匠さんが頑張っている資料を集めてやってくれました。私は1963年生まれで、万国博覧会に行った口なんですけれども、ハンパクについては全く知らないでございました。学園紛争とかベトナム反戦運動があったのは知っていますが、ハンパクなんていうのは非常に重要な意義のあることですが、歴史的な記録が残っていないのは大変残念なことです。私の教え子が立命館の教師になって、学生をベトナムの戦争証跡博物館に連れて行ったときに、日本の若い学生さんたちがベトナム戦争のときに反対をしてくれたのは知っている、大変感謝している、そういう声があったと聞きました。そういう意味でも、これはぜひとも残さねばならないという気がしております。今回、資料を集めるのに、学芸員さんも大変苦労してくれたんですけれども、資料が残っていないとしたら語りで残していくしかない。ハン

パクに行かれた方とか、関わった方のお話をまとめたいと思ったりするんですけれども、何か企画とかを立てられる計画とかはないのでしょうか。

○山本 いや、僕も木村も今日来ている昔の仲間も、こういう活動をしたことについて後世に残そうなどという気が全くなかったんですね。ここで発散したらそんでええみたいな、常にそういう感じで毎日毎日運動をやってたもんやから、全く未来に残そうとか、後世に伝えようとか、俺はこんなことやったなんて言おうという気が全然なかった。この間、立命館の若い研究者が突然来られて、へえー、そうか、わしらは歴史になったかと気づきました。考えてみると、それが50年前ですから、私の若いころの50年前の人というたら、1910年代で明治時代の終わりですよ。その人たちに、どんな運動でしたかと聞いているようなもんやなど。あの当時のことについて小田実さんはいろいろ丁寧に書き残されている。吉川勇一さんも丁寧に書いておられる。ただ、彼らの書いたものの中に僕らは入ってない。我々は東京ベ平連が嫌いやったんや。小田実さんはともかく、東京のベ平連というのは何かと議論ばかりして、行動は二の次になっていて、理屈ばかりこいとるから嫌やねん、あの会議が嫌やねんということから、ほとんど東京に行っていないんですよ。だから、後に吉川勇一さんがベ平連のことをまとめるときに、「ヤマケン、とにかく関西ベ平連の記録がないんだけど、君、ほんとにないのか」と言うから、「いや、ほんとにないんや、俺の頭の中にしかないねん」みたいなことで。今回、自分たちがやったことについて、いいとか悪いじゃなくて、ちゃんと残さないかんのやと初めて思った次第なんですよ。でも、もう今さら遅いね。もう忘れてしまったから。

○質問者（加國尚志）戦後の復興ということで東京オリンピック、それから万博という流れがあって、私もその繁栄の終わりのあたりの世代になるんですが、やはり戦後の歴史はそういうふうにかかれてしまいがちなんです。戦争でゼロになりました、でも東京オリンピックで復興しました、万博で高

度経済成長で、総括しましたみたいに。それはやはりおかしいだろうというのも仰るとおりだと思います。要するに東日本大震災の復興ということで、また東京オリンピックが行われ、大阪万博が行われ、同じストーリーで復興神話というのを日本の国家が反復していく、それに対して、市民の側はそれにカウンターを出しているんだという歴史をきちんと残す必要があると思いますので、ぜひお話でも、あるいはもし何かお持ちのものは、ぜひミュージアムで展示をさせていただきたいと思います。

○質問者（玉置栄二）桃山学院の史料室におります玉置といいます。何度か名前が出てきた小田実さん、山田宗睦さんは桃山学院の教員をやったんですけれども、そのほか、何か教員なり桃山関係でもし覚えておられることがありましたら教えてください。

○山本 一番丁寧にいろいろやってくれたのは、本川誠二²⁴⁾先生です。イタリア語をはじめ7カ国語を操れるすごい先生で、ヨーロッパのいろんな運動のことを教えていただき、また米兵脱走を手伝っていただきました。本川先生が一番親身になってくれはったな。あとは、沖浦和光さんとか、いろんな先生が集会でカンパしてくれたり、学習会の講師をしてくれたり、桃山の先生はいろいろ手伝ってくれはった。庄谷邦幸²⁵⁾先生は、今回の資料で協力してくれてはるようやけど、きっちり資料を残してくれてはったようです。ハンパク事務局長の木村満彦は、元桃山学院大学の職員で産業貿易研究所の職員やった。そのときに、ベ平連やらいろいろ活動をしてきていたんです。

○質問者 私は25歳なんですけど、計3回ぐらい、友達とかSNSで呼びかけて、反万博デモみたいなものをやったんです。さっきのお話聞いていて、私たちのデモに来る人が本当にサブカルチャーの中のサブカルチャーというか、変わった人しか来なくなるんですけど、何かそうなんです。全然メインカルチャーとはほど遠い人が結構来て、それが別に悪いというわけじゃないんですけど、町を歩いていても、何かどンドン自分らがキワモノと

いう感じになってきて、何かそれがすごい違和感があって、結局やめちゃったんです。フォークソングの力もあるのか、69年のハンパクがすごいメインの人も取り込んでいるという感じがして、その違いとか、今の時代にどこにメインがあるのかとか、じゃ、どことつながればいいのかとか、それで権力に対して反抗する意志をどう醸成していくのか、すごい難しくなっているんじゃないかなと思いました。

質問は、女性の参加者はどのぐらいあったのか、学生運動の性別のヒエラルキーとか、担い手と実際に来る人、その中に役割分担とかあったのかというのを、ハンパクはどうやったか聞きたいんです。

○山本 まず後ろの質問から言うと、女性が僕らの想像以上にたくさん参加してくれましたね。僕らが大ざっぱやいうこともあんねんけど、女性たちがいろいろな宛名を書いたり、それから会計処理をしたり、実務的なことはもうほとんど丁寧にやってくれたおかげで、使い込みもないし、領収書の収集・発行とか、全てちゃんとしている。それで、時間管理、スケジュール管理なんか、ほとんど女性がやってくれて、僕らは彼女らの指示で動いていたぐらいの感じです。仕事のほとんどは女性たちが全部決めてくれてやっていくというような意味で、丁寧な仕事をしてくれましたね。彼女らがいなければ、ハンパクは成功してないぐらいの実務能力を発揮して、お金集めも僕らよりも丁寧にあちこち、それこそ司馬さんの家に行ったり、ずっと回って行ってやってきていた。また、賛同人になってくださいと言って、学者の家を訪ねて行ったり、地道な活動はほとんど女性たちがやっていた。街頭演説は僕と木村がやるぐらいの感じでした。実際の展示や説明でも、女性たちが半分ぐらいいたんちゃうかな。そういうぐらいに、女性は多かったですね。そういう記憶です。

男がおって命令してというようなことは、全然ない。我々のところでは一応、代表は山田宗睦さん、事務局長は木村満彦と決めてるけど、全員同格で基本的には満場一致主義というか、とにかく

ややこしいことについては棚上げする。とりあえず一致していることだけ、みんなでやっていくということが基本でした。一応形の上では桃山学院大学の山田宗睦さんが代表でしたけれども、宗睦さんが会議に出てきたことは一回もないぐらいです。ほとんどは20代、10代がわあわあやっている、柔軟な組織だったから、みんなが普通に入ってこれた。小田実さんもよく言っていました、「我々ベ平連は言い出しべえが、この指たかれの中心になって、たかった者がやっていく。労力を提供できる者は労力を、資金カンパできる者は資金協力を、知恵を出す者は知恵を、自分が関われるかたちで参加していく。我々の中では上下関係なし」でやっていました。それから、反万博のデモが行われているというのにびっくりしました。最初、我々が反戦万博とかハンパクと言うたときは、そりゃ、誰一人来ませんでしたよ。例えば僕と木村がベ平連の旗を掲げて活動を始めた頃は、7人ぐらいのデモなんてしょっちゅうやったんですよ。それがある日突然、ソンミの大虐殺が明らかになって、とんでもないことやりよったぞという、いつの間にか最初は7人やったものが、最後になったら1,000人になったんですね。デモの人数が少ないと嘆く必要はありません。

僕らもう75歳を超えてしまって、今さらという気もあんねやけど、あなた方がもしハンパク、反万博ということでデモをされるのなら参加しますよ。それから大阪万博の広告塔になっているノーベル賞をとった山中伸弥さんに、あんな万博でいいんですかカジノと一緒にやるんですかというふうに語りかけていくようなことを憶せずしたほうがいいと思います。当時、例えば司馬遼太郎さんから10万円もろてきた女性の場合で言えば、そんなもん、司馬遼さんとこへ行ったってあかんでいう僕らが言うてるのに、そんなことはない、家に行きますと言うて行って、話をしてくて、そりゃ、そうかというふうにして納得してもらいたいな、そういうことがあるわけです。最初から、この人は万博側やでとか決めずに、どんどん語りかけていくことが広がっていく出発点ではないか

という気がするんですよ。僕や木村は一軒一軒回るよりも、梅田地下街を通っている人に話しかけた方が早いということでやっていった。歌を歌う者もいれば、詩を朗読する者もいる。訴えたいことは何でもやる。活動を一つに決めずにさまざまな形でやっていったことが、広がっていった非常に大きな理由だと思います。僕が梅田地下街に立っているときに、僕が勤めていた広告代理店の社長が、「ひょっとしたら、おまえ、うちの会社の社員ちゃうか」言うて通っていったことがあるわけですよ。それでも、首にしなかった。そういうもんなんですね。

だから、臆せずに語りかけるということは、あなた方がやられたとおり、我々もそう思ってやっていった。結果として、それがどんどん広がっていったという意味で、ありがたい時代ではあったんだけど、今非常に厳しい時代になって行動できず、本当にみんな、未来を信じることができなくなっていると思います。

僕、別にれいわ新選組の宣伝をしようと思ってへんけど、山本太郎のあの演説にあんだけたくさんの方が集まる。びっくりしますよ。安倍の組織動員よりすごいよ。全くメディアは取り上げないけど。でも彼は今日の状況に堂々と異議申し立てをやっている。堂々と論陣を張る。臆せず言う。たった1人でもいい、7人でもいい、そういうふうに語りかけていくことが広がっていく出発点ではないのかなと思うんです。だから、もしあなたが、今度、ハンパクのデモをするいうんなら、僕、参加するから教えて下さい。

- 質問者（黒川典是）先ほど、内部規律がしっかり行き届いていたという話がありましたが、そうした会場内での情報の伝達方法、対外的なビラ類はどれぐらい刷って、どういうタイミングで、どこへ配っていたか、お伺いできればと思います。
- 山本 毎日、「ハンパクニュース」というのを配っていましたが、これは見に来てくれた人たちに対する展示や討論会などのお知らせです。もっと大事にしていたのは出展してくれている団体や個人に対する運営からの連絡と確認事項の徹底で

す。

全体で決まったことについては、おおざっぱに連絡するんじゃなくて、参加組織や団体の責任者に必ず伝えるという大原則はやりましたね。確認事項を書いた文書を一方的に配るんじゃなくて、ちゃんと確認するアナログな伝達をしていました。それがよかったんじゃないかなと思いますね。

それから、もう一つは、さっきの墜落戦闘機の残骸のことで、警察が動いていました。その動きについて、アマチュア無線の若いグループが大阪府警、近畿管区警察局がやっている無線連絡を全部傍受して、警察はこういう動きをしてるから警戒しろと僕らに伝えてきてくれていました。こっち側のほうに機動隊の一個師団がいとる。だから、こういうことでやろうとかというふうに、それに見合った対応をその都度行ったわけです。文章をべらっと回すとか、現在で言うと、メールで回すことになるのかもしれませんが、メールって信用できへんでしょう。実際にそいつがやってるかどうかわかれへん、なりすましみたいなことがある。我々の動きが警察に筒抜けになるのが怖いから、顔を知ってる者同士が必ず確認し合うことを徹底しました。それが良かったんじゃないかなと思います。ビラを回したら、必ずそれは公安などは絶対入手しよるからね。そのために入ってきとるんやから。変に過激なことを言うやつにも気をつけました。攪乱するために送り込まれている私服警察官もいたでしょうからね。明らかにあいつらやなというやつがおるから、そういうことを警戒しては対応したとしました。一番怖かったから、それが。

○質問者 対外的な参加の呼びかけというか、そのあたりはどうでしたか。東京のベ平連が嫌いとおっしゃって、東京からは結構参加者が多かったんですけど、そのあたり、どうだったんでしょうか。

○山本 小田実さんや小中陽太郎さんら、東京で中心になっている連中が、ハンパクはおもしろいと、みんなで行こうといって来てくれたので、広まりました。ハンパクを進めるための全国会議みたい

なもの何回か開催してくれたこともあって、全国のベ平連に広がりました。新聞社、テレビ局、雑誌、そういうたぐいは、ほとんど東京から連れてきたと言っていいぐらいです。

大阪の記者クラブで僕や木村が記者会見をするというようなことは、ほとんどしてません。向こうから取材に来るとするのは、答えましたけども。あえて記者会見をしてというような大げさなことは2人とも嫌いやからしなかった。新聞や雑誌にハンパクのことが載っているのは、小田・小中・鶴見さんら東京の知識人たちが、記者たちに話したり、雑誌などに書いてくれた結果でしたね。だから、ハンパクが何に載ってたかみたいなことはほとんど僕ら知りません。『アサヒグラフ』に載ってたらしいとか、『朝日ジャーナル』に書いてあったとか後から聞いたことでしたね。

○質問者(黒ダライ児) 2回目の質問ですみません。

先ほど、最初にすごく一般的な質問をしてしまいましたので、次は逆に、すごく特殊な質問をさせていただきますけど、先ほど後ろの方が言われたように、この中に参加したキワモノの人たちなんですけど、例えば山本さんは、裸でふんどしに「わいせつ物」と書いている、あの人たちがどういう人たちか、ご存じでしたか。

○山本 僕らは知ってました。日本では表現が制限されているので、制限されていることを訴えたいし、ここで自由に表現したいと言っていました。中には、セックスして、上から気球でおりにきたいというようなことを言うてるメンバーもおりましたよ。それは官憲が介入してくる口実になるので、よそ行ってやってくれと言いました。彼らの思いを聞いた上で、我々の考えをしゃべりました。納得してくれて、あの格好になったと思います。

○質問者 わかりました。あの人たちは、東京の「ゼロ次元」と「告陰」という2つのハブニンググループが合体して結成した「万博破壊共闘派」のメンバーなんです。それで、今日展示してある資料の中で、彼らが何かやったという予定とか記録が出てないか一生懸命探したんですけど、全く出てなかったです。一つ、感想になっちゃうんで

すけど、このハンパクのすごくおもしろい、先ほど言った東京と違うというのは、非常に文化プログラムというか、それも必ずしも反戦フォークとかじゃなくて、こういう本当にまさにキワモノ中のキワモノみたいな、そんなものまで許容したというところが非常に何か興味深い。

○山本 表現の自由はあらゆる意味で大事なことやと思ったんですよ。そういう色味を持たないとだめだと僕は思ってたから。キワモノとして見られようが、やってもらったんです。ちゃんと物言うのとと理解しないと、やっぱりハンパクに出て来ている人間も嫌ですよ。

○番匠 せっかくいらしてくださいるので、木村満彦さんもぜひ一言お願いします。ハンパク協会の事務局長です。

○木村満彦 こんな老人があんまり世の中に顔を出さないようにしていたんですけれども。去年、名古屋の大学の先生が私のところに来まして、脱走兵の話の聞きに来たんです。30年前のアメリカの文書、CIAの文書がやっと公開されたということで、その翻訳をしていたと。その中でベ平連というのが出てきて、また木村という名前が中に出てきたので話を聞きに来たというわけでした。それもベ平連の仕事の一つで、脱走兵支援もやったんです。それからしばらくしたら、今度はハンパクを調べている若い研究者が来まして。立て続けにここ一、二年で昔の話を引っ張り出されるようなことになりまして、今日参加させてもらったんです。話を聞いていてああ、こんなことをやったんかなというのが正直な実感です。脱走兵の話は、一生話すことはない大失敗の話だと思っていました。けどこのハンパクの話は世間に言って誇れる話かなという感じを、今日持ちました。本当にありがとうございます。こういう運動が消えることなく続くことを、本当に願っております。ありがとうございます。(拍手)

○山本 ほんまにこういうのを記録されること自体、非常にうれしいです。今、彼が言うたみたいに、ベ平連としては脱走米兵を助ける活動もしたわけです。でもほとんどがCIAのスパイやったんで

すよ。言ってみたら我々の運動の内部のことが全部CIAに筒抜けになってしまったんです。だからハンパクについて、ファントムの残骸を展示し、それを警察やアメリカに取り返されずに、九大に持って帰ることができたなという意味では、非常に奇跡的だったなと思っているんです。改めてこうしてみんなから聞かれてみると、なるほどそうか、我々がやったこともそう無意味ではなかったんだなと思いつつ、こうしてしゃべらせていただきました。

展示の写真は、我々大阪のメンバーでない人が撮ってるから、僕らから言うと偏ってます。当時、我々の中でカメラを持っている人間は、誰もおりませんでした。写真班も決めてなかったから、何一つ記録していない。そもそも記録しようなどと思ってもいなかった。そういう意味では悲しいというか、それが当時の我々でした。皆さんからいろいろご質問があって、我々自身がやったことを、もう一回客観的に位置づけてみて、記憶も取り戻しつつしゃべらせてもらいましたが、歴史は繰り返して2020年東京オリンピックの後にもまた2025年大阪万博というあほなことになっています。今回はバブル時代の大阪湾岸開発の負の遺産の上に万博をやろうとしているわけですね。70年万博は戦争のマイナスの遺産の上にやったわけです。また同じ歴史を繰り返そうとしている。70年万博で、「大阪は世界に知られる、大阪の経済は元気になる」といわれたけど、70年からずっと大阪の経済は沈み続けなんです²⁶⁾。今もそうですよ。日本第二の都市じゃありませんよ。いまや神奈川に抜かれ、もうちょっとしたら愛知に抜かれる。「世界の国からこんにちは」と言って、70年万博の6,900万人の入場者うちの外国人って数万もいなかった。国際万博でも何でもありませんよ。日本博ですよ。今度はインバウンドがというようなことを言うてるけど、何をぬかしとるねんと思います。

やはり今日本が抱えている問題、大阪が抱えている問題を含めて、かつて我々がやったような形で今改めて、問題を放置したまま万博だといって

嬉しがっていていいのかと提起していく必要があるんじゃないかと改めて感じました。僕らの拙い話を聞いていただいてありがとうございます。(拍手)

○番匠 今日は本当にありがとうございました。まだまだ今回、展示も中間報告ということで、これから聞き取り調査、資料収集なども随時進めていきたいと思っておりますので、また今日いらっしゃった方々にもご協力をお願いすることもあると思っておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。(拍手)

山本健治追記

- 1、私の講演は、まったく文章になっていないので、話したかった内容が通じるよう、校正の段階で文言を付加させていただいたこととお断りしておきたい。文末の注は番匠によるものである。
- 2、我々の「ハンパク」はベトナム反戦・沖縄問題を大きな柱とすることによって世界とも関わったつもりでいたが、いま振り返ってみると、国内問題中心だったことを反省しないわけにはいかない。2025年大阪万博に意義申し立てする「ハンパク」をやるとすれば、核兵器廃絶・反原発、地球希望の温暖化・異常気象・環境破壊、格差・貧困・機が・疾病、自国第一主義と民族排外、ヘイトスピーチなどといった課題について、市民やNGOなどが世界各地から相集い、語りあい、具体的な行動を確認しあう「国際ハンパク」になってほしいと思わないわけにはいかない。2025年大阪万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をメインテーマに掲げ、「多様で心身ともに健康な生き方」「持続可能な社会・経済システム」をサブタイトルとしているが、先に挙げた問題を放置して、未来社会を語ったところで絵空事であることは明らかではないか。
- 3、2000年6月、ドイツのハノーバーで万博が開催されようとしていた直前、ハノーバーで反核運動をしている「独日平和フォーラム」の友人から70年大阪万博はどのような結果をもたら

したのか質問された。その時、大阪経済の浮上を目指していたが、まったく成果が上がらず、大阪府北部の丘陵地帯が開発され、農地は消滅し、高速道路などが建設されてインフラが充実したと評価する人たちもいるが、われわれは環境が破壊されただけだと思っているという話をした。ハノーバー万博は「人間・自然・技術」をメインテーマに環境万博を謳って開催されたが、コンクリートのハコモノがつくられただけで、たいへんな赤字で終わったという後日報告があったことを付け加えておきたい。

【注】

- 1) 山本健治 [1943-]：大阪生まれ。関西ベ平連事務局長。高校2年の時に安保反対デモに参加、1962年に立命館大学法学部に入学、一部法学部自治会・一部学生会の委員長、京都府学連副委員長などをつとめる。卒業後、大阪読売広告社、村田製作所に勤務する傍らベ平連に参加し、ベトナム反戦・反安保を訴え、御堂筋デモや大阪駅前での街頭ビラまき、毎週末には梅田地下街でフォーク集会を開催した。関西では西は兵庫県の姫路、東は三重県の名張まで地域ベ平連をまとめるものとして「関西ベ平連」を発足させ、事務局長として活動した。その活動の一つが「ハンパク」である。1969年には村田製作所の専従書記長に就任し、労働運動に専念する。1974年より高槻市の道路建設反対運動を担い、琵琶湖・淀川の汚染問題、市民による保育所建設運動などに参加し、無党派議員のさきがけとして高槻市議会議員(1975-83年)、大阪府議会議員(1983-87年)をつとめた。この後、フリーライターとして夕刊紙・週刊誌に寄稿する一方で、朝日放送や関西テレビなどでコメンテーターをつとめる。現在もラジオ大阪「坪井&ヤマケンの新・世直しのツボ」で時局に関する発言を続け、高槻で市民勉強会を続けている。主な著書として『インサイド・レポート笑説「地方政治と自治」』楽志社、1983年、『プライバシー侵害』柘植書房、1988年、『年表・子どもの事件』柘植書房、1989年、『橋下徹論』第三書館、2012年、『戦後70年労働災害と職業病の年表』第三書館、2015年など。
- 2) これまでハンパクを論じたものとしては以下を参照。針生一郎「反博——反戦運動の試行錯誤」『現代の眼』1969年10月号、鶴見良行「ハンパクの五日間——予言的な“小さな実験”」『朝日ジャーナル』1969年8月24日号、小田実『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館、1995年。
- 3) 飛鳥井雅道 [1934-2000]：東京都生まれ。京都大学人文科学研究所教授。主な著書としては『幸徳秋水 直接行動論の源流』中公新書、1969年、『日本プロレタリア文学史論』八木書房、1982年、『天皇と近代日本精神史』三一書房、1989年、『日本近代精神史の研究』京都大学学術出版会、2002年、編著として大杉栄『自叙伝・日本脱出記』岩波文庫、1971年、『大杉栄評論集』岩波文庫、1996年など。

- 4) 中岡哲郎 [1928-]: 京都府生まれ。大阪市立大学教授。京都大学卒業後、定時制高校教諭を経て、技術者として阪神溶剤機材に勤務、1968年より神戸市外国語大学講師、1976より大阪市立大学に勤める。主な著書として『現代における思想と行動』三一新書、1960年、『若い日の生き方』三一新書、1963年、『人間と労働の未来』中公新書、1970年、『コンピュータの労働と社会』平凡社、1974年、『近代技術の日本の展開』朝日新聞出版、2013年など。ハンパク会場では、ハンパク市民大学「科学と戦争」に登壇。
- 5) 小松左京 [1931-2011]: 大阪府生まれ。SF作家。父親の工場を手伝いながら書いた小説が、大阪砲兵工廠を舞台とした『日本アパッチ族』光文社、1964年となる。1965年のペ平連結成時には呼びかけ人となり、のちの1970年の大阪万博ではサブ・テーマ委員を務めた。大阪万博での小松の体験については、『巨大プロジェクト動く——私の「万博・花博類末記」』廣済堂出版、1994年を参照。
- 6) 新明和工業では、朝鮮戦争にともない燃料タンク生産で航空機部門が再開し、甲南工場では海上自衛隊機 P2V-7 の協力生産、1960年から1967年までの米海軍飛行艇の修理（累計128機）、航空自衛隊 C-46 輸送機の部品製作と修理、YS-11 旅客機の後部胴体の生産、航空自衛隊 F-104 ジェット戦闘機の燃料タンクを生産と修理などを行っている。また1953年には米軍機のオーバーホール事業を受注するため、米軍管理下の伊丹航空基地（現伊丹空港）の隣接地区の土地を購入、翌年伊丹工場が完成した。米海軍と作業契約を結んだ後に米軍機のオーバーホール事業を拡大し、防衛庁の軍用機の修理や改造、民間機の修理などを含む、航空機のオーバーホール専門工場として地位を固めていった。1979年の社史には「軍用機を扱っていることに対して、一部の団体からデモが繰り返されるようになり、空港と空港周辺に色々迷惑を掛けることが多くなった」ことに加え、国際空港に昇格した伊丹空港の離発着便の増加によりテスト飛行の制限があり、1969年12月に今後2年以内に伊丹工場のオーバーホール作業を中止するとの宣言がされた、とある。新明和工業株式会社社史編纂委員会『社史1』新明和工業株式会社、1979年。
- 7) 日本油脂は、現在の日油株式会社。終戦後、GHQにより兵器用火薬の製造設備は撤去、他産業への転換がなされていたが、朝鮮戦争の勃発により再開。1951年3月のナバーム信管を皮切りに、各種砲弾、機銃弾、手榴弾、地雷、爆破薬などの発注があった。「当社の兵器用火薬は第二次世界大戦中、海軍の供給源となっていただけに、技術的にすぐれており、たとえば昭和27年（1952年）5月、米軍調達部から3回にわたって発注のあった81ミリ迫撃砲弾62万4,500発、81ミリ迫撃砲発煙弾7万発、81ミリ迫撃砲照明弾3万2,000発、4.2インチ迫撃砲弾36万3,300発の火薬所要量（無煙火薬201トン、TNT1,694トン、テトリール22トン）の大部分は当社が受注した」とある（社史編纂委員会『日本油脂三十年史』日本油脂株式会社、1967年）。朝鮮戦争では米軍の製造管理技術を習得した上で、火薬需要は自衛隊に引き継がれていく。第一次防衛整備計画（1958-60）ではアメリカ依存であった自衛隊の武器は、第二次防衛整備計画（1962-66）では装備の近代化と国産化が図られ、第三次防衛整備計画（1967-71）以降は、武器の質的転換と増強が図られた。第3次防にともなうナイキ-Jとホークミサイルの配備が決
- 定し、日本油脂はコンボジット推進薬であるナイキ-Jのサステナモーターを受注した（日本油脂株式会社社史編纂委員会『日本油脂50年史』日本油脂株式会社、1988年、445-449頁）。
- 8) 黒田征太郎 [1939-]: 大阪府生まれ。いたストレーター、グラフィックデザイナー。デザイン事務所に勤務後、1969年に長友啓典とK2を設立。同年、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレで受賞。岡林信康のコンサートのポスターやCDのジャケットも手掛けている。著書に黒田征太郎・長友啓典『K2』ギンザ・グラフィック・ギャラリー、1996年。
- 9) 木村満彦 [1942-]: 大連生まれ。関西ベ平連、ハンパク協会事務局長。引き揚げ後は岐阜の親戚方に身を寄せ、小学校から名古屋に転居。高校時代に60年安保を経験する。1962年に関西学院大学社会学部に入學、社会科学研究会に所属した。自治会委員長を経て、兵庫県学連副委員長時代に山本健治と出会う。1966年に桃山学院大学産業貿易研究所の職員となるも、ハンパクの専従となるため辞職。全国電気通信労働組合近畿地方本部で書記として労働運動に取り組んだのち、実家のガラス店を継ぐ。
- 10) 中川五郎 [1949-]: 大阪府生まれ。1967年に高石ともやと出会いフォークミュージックに目覚める。1968年に「受験生のブルース」や「主婦のブルース」を発表。レコードとして『六文銭・中川五郎』URCレコード、1969年、『終りはじまる』同左、『25年目のおっぴい』フィリップス、1976年、『どうぞ裸になって下さい』コスモスレコーズ、2017年など多数。著書として中川五郎『70年目の風に吹かれて』平凡社、2019年。訳者として『U2詩集』『ボブ・ディラン全詩集1962-2001』、ブコフスキーの『くそつたれ！少年時代』『詩人と女たち』『ブコフスキーの酔いどれ紀行』『死をポケットに入れて』ほか多数。
- 11) 高石ともや [1941-]: 北海道雨竜町生まれ。1966年に大阪労音フォークコンサートに初出演、1969年12月に学生運動・反戦運動と共に生きてきたフォークソングの終わりを決意、ソロ活動を停止。1970年にアメリカ、カナダをひとり旅、帰国後に福井県に移住。1971年にザ・ナターシャセブンを結成し京都で活動を再開、ブルーグラス、アメリカンフォークと日本の民謡の融合を目指す。マラソンランナーとしても知られている。レコードとして『思い出の赤いヤッケ』ビクター、1967年、『受験生ブルース』ビクター、1968年、『坊や大きくならないで』ビクター、1969年、『あわてなさん』マクランサ、1997年（高石ともやとザ・サファリングール）など多数。
- 12) 「らいの家」は奈良のハンセン病回復者の宿泊施設「交流（むすび）の家」から資材を運び、全国のハンセン病療養所に収容されている人々に送った往復はがきの返信が展示された。ハンパク会場での総リーダーを務めた徳永進の回想には以下のように記されている。「強制収容に対する怒り、日常生活の待遇改善の要求、父母、家族、故郷への思いがハガキには書き込まれていた。いくつかは、拡大してパネルとし展示した。会場の中で、いびつなパネルの小屋は目をひいた。」徳永進『ワークキャンプの思い出』『病気と家族』集英社文庫、1996年。ハンパク会場の「らいの家」の展示団体は、Friends International Work Camp (FIWC) 関西委員会、

第二次世界大戦後の荒廃したヨーロッパの街々をテントを張りながら労働で修復していったクェーカー教徒の流れをくむボランティア団体。吹田の朝鮮人地区、宝塚の身体障害者施設、ハンセン病療養所などでワークキャンプを行っていた。木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語』岩波書店、1997年参照。徳永進 [1948-] 鳥取県生まれ。1968年に京都大学医学部入学、1回生の夏に「交流の家」で初めてのワークキャンプを体験する。ハンパクでは「らいの家」の総リーダーを務め、卒業後は国立京都病院、吹田同和地区の診療所勤務を経て、鳥取赤十字病院の内科部長。1989年に鳥取市内にハンセン病で故郷を追われた人が泊まれる「こぶし館」を建設、現在はポスピスカアを目的とする野の花診療所院長。著書として、『隔離 らいを病んだ故郷の人たち』ゆみる出版、1982年、『臨床に吹く風』新興医学出版社、1986年、『野の花ホスピスだより』新潮社、2009年など多数。

- 13) 高野雅夫 [1939-] : 満州生まれ。父親と死別後、引揚げ途中に母と死別、戦災孤児となる。博多の闇市、東京の上野公園、山谷などで生活、パタ屋のお爺さんから「いろはかるた」で「文字とコトバ」を学ぶ。1964年、東京都荒川九中夜間中学を卒業。1967年から夜間中学廃止反対運動、創設運動に取り組む。1998年9月から韓国留学。大阪人権博物館で2017年には「夜間中学校」の特別展が開催、2019年には高野の大阪での夜間中学設立運動を描いたドキュメンタリー「浮浪児マサの復讐」(1969年、TBS制作)が上映された。著作として『夜間中学生タカノマサオ』解放出版社、1993年など。
- 14) 小山仁示 [1931-2012] : 和歌山生まれ。関西大学文学部教授、日本近現代史。大阪府・和歌山県・兵庫県・奈良県の自治体市の編纂に関わる。『戦前昭和期大阪の公害問題資料』ミネルヴァ書房、1973年、『大阪大空襲 大阪が壊滅した日』東方出版、1985年、『西淀川公害 大気汚染の被害と歴史』東方出版、1988年、『大阪にも空襲があった』大阪国際平和センター、1991年、『現代史を見る目 戦争・差別・公害』解放出版社、2001年、『空襲と動員』解放出版社、2005年。
- 15) 小田は自身の著作のなかで大阪砲兵工廠と8月14日の空襲について繰り返し言及している。「(8月15日をめぐる死として) 私が想起するのは、いや、いやおうなしにねちねちと私の記憶のなかにいつまでもあるのは、その前日だったかにあった大阪の大空襲のなかで殺されていった人たちの死である。その日、それまでほとんど無傷のまま残されていた、当時東洋一を誇る砲兵工廠は完全に壊滅した。そして、その工廠のなかで、その周辺でおびただしい数の人間が殺されたのである。あれこそ、もっとも無意味な死ではなかったろうか。すでに敗戦は確定していた。私は工廠近くに住み、したがって防空壕のなかでふるえながらその地獄の午後をすごしたのだが、空襲のあとで、空からまかれた「お国の政府が降伏して、戦争は終わりました。」云々のビラを拾ったのである。あの死をどんなふうにかえることができるのか。たしかなことは、彼らの死がいかなる意味においても「散華」ではなく、天災に出会ったとでも考える他はない、いわば「難死」であったという事実、ただそれだけであろう。その「難死」は私の胸に突き刺さる。戦後二十年のあいだ、私はその意味を問いつづけ、その問いかけの上に自分の世界をかたちづくって来たと言える。」(『難死の思想』『戦後を拓く思想』講談社、1965年、12頁)。また「(大阪砲兵工廠の) 廃墟は、それを

見た人に、何か宿命的な力を及ぼした。… (中略)。私の見たもの——そこには何もなかった。すくなくとも、輝かしいものは何もなかった。すべてが矮小であり、ケチくさかった。たとえば、死さえも悲しいものでなかった。悲劇ではなかった。街路の上の黒焦げ死体——それは、むしろコッケイな存在だった。私は、実際、死体を前にして笑った。何かがあるとしたら、それは私の心のなかに黒焦げ死体が残したものであった。」(『廃墟の中の虚構——戦争体験の意味』、同271-2頁)と述べている。

- 16) 8月14日の空襲については小山仁示の著作を、空襲体験については大阪砲兵工廠慰霊祭世話人会『大阪砲兵工廠の八月十四日—歴史と大空襲』東方出版、1983年を参照。
- 17) JR京橋駅南口、大阪大空襲京橋駅爆撃被災者慰霊碑。毎年8月14日に慰霊祭が行われている。
- 18) 鈴木祥蔵 [1919-2009] : 宮城県白石に生まれる。1943年、京都帝国大学文学部哲学科卒業後、大学院の途中で中国戦線へ出征、敗戦後はシベリアで3年抑留され、1949年に京都大学大学院に復学。1950年に関西大学専任講師に就任。戦後の教職員組合運動、部落解放教育・保育運動、幼児教育や美術教育の実践などに影響を残した。1977年「社団法人乳幼児発達研究所」(後に「子ども情報研究センター」に改称)を創立して、初代から2000年まで所長を務める。教育論、子育てに関する著作多数。
- 19) 1965年、映倫の審査を通過していた武智鉄二監督の『黒い雪』が、刑法第175条で起訴されるが、裁判の結果無罪となった事件。
- 20) 万博破壊共闘派のパフォーマンス。前後の活動については黒ダイヤ児『肉体のアナーキズム』grambooks、2010年を参照。
- 21) 九州大学電算センターに墜落したファントムについては、毎年6月2日に福岡市内で集会が継続されている。ファントム墜落事件の経過については『あの日あの時の時代——ファントム墜落50周年・さよなら九州箱崎キャンパス』花書院、2018年を参照。
- 22) 山本健治「労働災害・職業病闘争の経験——村田製作所の防災闘争」『労働調査時報』620号、44-46頁、1972年及び同『戦後70年労働災害と職業病の年表』第三書館、2015年を参照。
- 23) ハンパク会場に持ち込まれたファントムの破片は一抱えほどの大きであったが、福岡ベ平連のメンバーへの聞き取り調査では、炎上してもろくなった部分を来場者が「お土産」にちぎって持って帰り徐々に小さくなっていったとの証言がある。
- 24) 本川誠二 [1920-1989] : 桃山学院大学社会学部教授。グラムシやイタリア・ファシズム研究関係のイタリア語図書が大阪府立図書館に所蔵されている。翻訳としてパブロ・ネルーダ『ネルーダ回想録』三笠書房、1976年、R. デ・フェリーチェ『ファシズム論』平凡社、1973年(藤沢道郎との共訳)。竹内安雄、羽出庭梟、代久二などのペンネームで、パブロ・ネルーダやグラムシ、イタリア共産党関連の翻訳が多数。
- 25) 庄谷邦幸 [1931-] : 桃山学院大学教授、元大阪市公文書館館長。著書として『産業集積の構造と地域振興政策』明石書店、2007年など。
- 26) 山本氏の大阪論については小田実・山本健治『「虚業」の大

阪が「虚像」の日本をつくった』経林書房、1988年及び、
山本健治『橋下徹論』第三書館、2012年を参照。